

摩訶不思議な山 ヒマラヤ チュルー・セントラル峰

～敗退を膝栗毛道中記にかえて～

2007 年 10～11 月 山なかまシリウス個人 4 名



(チュルー・ウェスト峰 6419m・西壁。ベースキャンプより)

何とも摩訶不思議でヘンテコな山であった。キャラバンを始めて 10 日以上歩いてやっとベースキャンプに到着するも、今回の目標チュルー・セントラル峰 (6584m) は全くその姿を見せないのである。それどころか、BC から更に前進キャンプを 2 つ進めた先の、頂上直下から落ちる氷河に至って初めて、やっとその全容を顕すらしいのである。日本国内はもとより、広大なヒマラヤやアンデスなどでも、大概は BC までのキャラバン中に目標の山を遠望できて、ルートの研究や雪の状態や登攀のあれこれなどを想像して登高意欲を掻き立ててくれるのが普通であるが、この山に限ってそのような期待は全くできなかった。

上の写真は、セントラル峰の西 1.5km に位置するチュルー・ウェスト峰(6419m)を BC から望んだものであるが、目標であったセントラル峰はこの山の向こう側に隠れていて見えないのである。

例年にない多雪のために山頂までの標高差を 1000m も残して撤退したので、延々 1 ケ月も費やして日本から登りに来たのに、その山容にも全く接することができなかったというヘンテコな山行となって、些か欲求不満が残った次第である。帰途、世界一大きい峠と言われているトロン・パス (標高 5400m) を越えた際、ウェスト峰の裏にチョロツと山頂部だけが小さく薄っすらと遠望できたのが、唯一この山を見た最初で最後であった (次ページの写真)。

チュルー峰には 6000m 級のピークが 4 座あり、それぞれ West、Central、East、Far-East と呼称されているが、実は現地でも世界的にも、実際のピークとそれぞれの山名呼称に混同があり、混乱をきたしている。この理由の一つが、たまたまウェストに登った登山者がこれよりも高い別な峰がすぐ側に存在することを発見し、これを報告したが、人間が住み着いている山麓から見えない山というものは、存在しないのと同じことで、幻の山となっているという事情によるものと考えられる。

今回も目標の山を検討する段階で種々の文献に当たってみたが、文献間の整合性は全くとれなかった。ネパール政府 (ネパール山岳協会) もこのことは認めているが、正式に決定するには再測量などもしなければならないから、実際には放置されているのが現状である。最近ではイギリスの山岳団体が提案し

た山名同定の提案が優勢になっており、地元の山岳団体やガイドもこれを採用しつつあるが、政府側は正式に認めるまでに至っていない。左様な次第で標高値なども地図によってマチマチとなっていて、正確な標高は“藪の中”というべきであろう。今回も地元のアドベンチャー会社にガイドその他を頼んだが、彼等も時間が取れば役所に同道するから、早く改定するように外国人登山者からも依頼してくれないかと言っていた。



(やっと見えたチュルー・セントラル峰。最奥、太陽の真下。右のピラミッドがウェスト峰)

5400mの峠トロン・パスから望遠。同行の藤ノ小路孝麿殿下撮影

さて、前置きが長くなったが、今回このヘンテコな山を選んだ動機から始めたい。昨年のイムジャ・ツェ峰から下山の際、チベット仏教の大寺があるタンボチェからナムチェ・バザール方面を見ると、ナムチェ・バザールの対岸正面にギザギザの氷の稜線が聳えているのが見えた。ヒマラヤ麓に囲まれていて、登高意欲を駆り立てる山容だったので、ガイドに聞いてみたら滅多に入山するパーティーも無いコンデ・リという標高 6200 程の山稜だという。

ますます気に入って帰国後文献を漁ってみたら、全くそのとおりでインターネットで調べてみても日本はおろか外国のホームページでも登攀記録は全くヒットしなかった。試みにネパール山岳協会の入山記録で調べてみると、毎年数パーティーの登山許可申請は出ているが、ここ 2 年ほどは入山者ゼロと記載されていた。日本人は滅多に入らない山域だそうだから、これはひょっとすると日本人初登ではあるまいか？よくよく過去の記録を調べて見たら実は続々と出て来た。1972 年慶応大学山岳部 OB 隊、1989 年青山学院大学隊、1992 年立教大学隊、1993 年明治大学隊、1998 年 J R 東日本山岳会隊がそれぞれ登頂していた。マ、しかし、これらは大規模なエクスペディション



(タンボチェ付近から望んだコンデ・リ峰)

ンであるから、個人山行としての日本人登頂は初めてかも知れないし、登攀も相当困難なようだから、大枚を叩いても、それはそれなりに価値があるだろうと大いに気合が入ったのであった。

早速イムジャ・ツェの同行メンバーに諮ってみた。しかしながら、残念無念・・・。「コンデ・リ」という言葉は「悪魔の住む山」という意味であるから不吉なことが起きるのではないかと、この山は難し過ぎる、往復のキャラバンの途中に集落が無くテント泊が大部分になる、大枚を払って出かけるには標高が低すぎる、かてて加えて全く知名度が無い、エベレスト街道周辺の山々は見飽きた、云々の理由で一部の人からの猛反対に遭ってボシャってしまった。

それでは、他の山でも探すかということで、標高 6500m 以上で比較的登り易く、かつ日本人が余り登っていない山はないかと探してみたら、アンナプルナの北側に入山者も比較的少ないチュルー山群というのが見つかった。この方面は皆さんも初めてだし、キャラバンの途上でマナスル、アンナプルナ、ダウラギリなども眺望できるし、何よりも初登が 50 年程前の日本隊（日本山岳会のマナスル偵察隊）であるそうだから縁起も良いのではないかとそのチュルー山群を選び、その中の最高峰と言われるセントラル峰に焦点を合わせたのであった。日本人の登攀記録を調べてみると、West、East、Far-East に登った記録は出て来たが、Central 峰に登った記録は無いようだから、ここもひょっとしたら日本人初登かも知れないゾ。

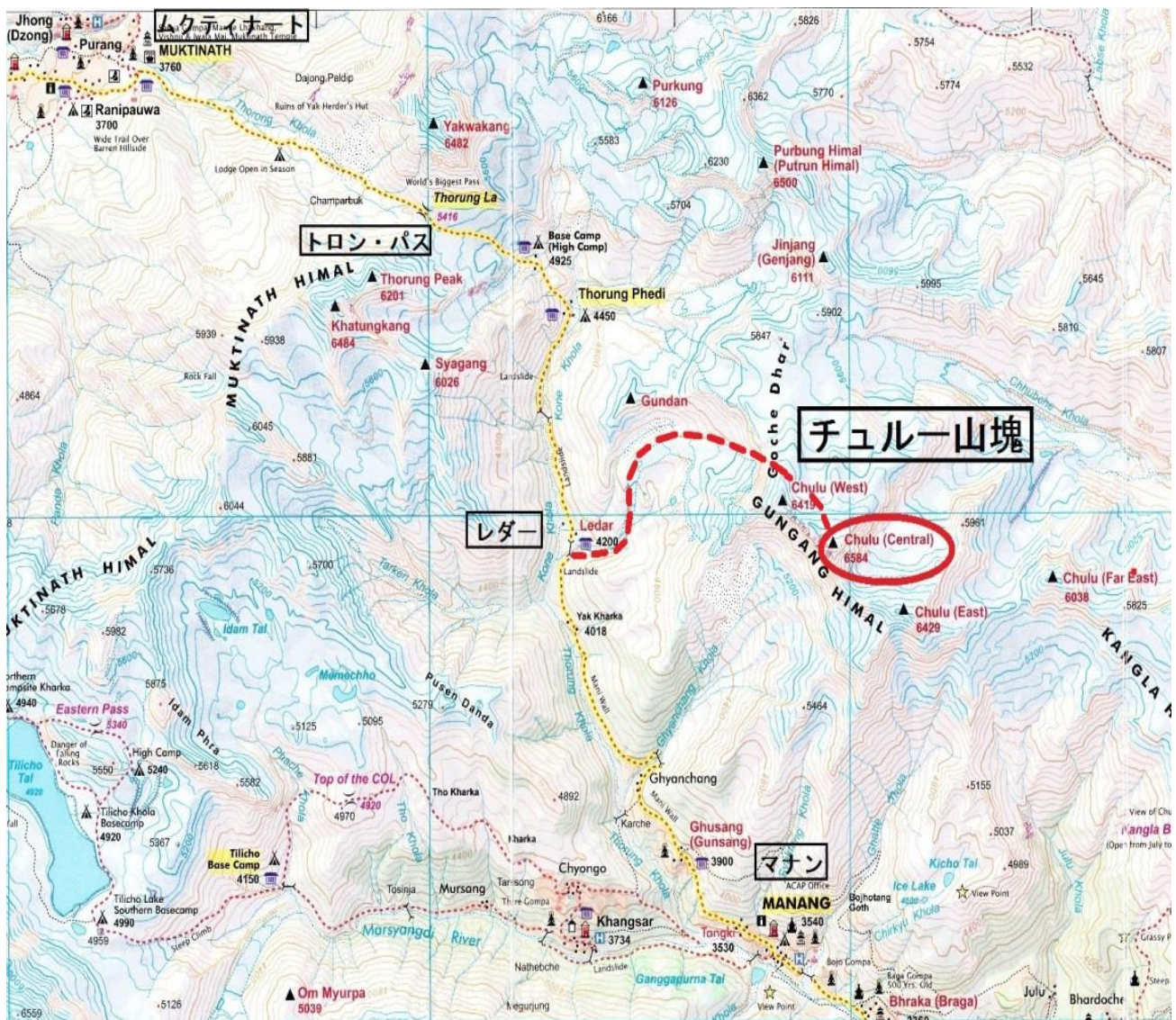
チュルー山群に入るには、通常はカトマンズから西に飛行機で 30 分飛んだネパール第 2 の都市ポカラで乗り換えて、そこから更に 20 分ほど飛んだ山奥の町フムデからキャラバンを開始して、通称マルシャンディ街道をアンナプルナ・ヒマールの北側まで廻り込み、チュルーに登頂した後、また往路を引き返すのが一般的であるが、フムデ空港は週に 2 便しか飛ばない超田舎空港で（滑走路も舗装されていない）、飛行機では不便であることから、我々はフムデの遥か手前の、カトマンズから車で 7 時間ほ

どの交通・通商の要衝の町ベシ・サハールからマルシャンディ街道に沿ってキャラバンを開始し、登頂後もキャラバンを進めて上記世界最大の峠トロン・パスを越えて仏教とヒンドゥー教同居の聖地として有名なムクティナートに下り、秘境ムスタンへの入り口であるジョムソンに至る、所謂アンナプルナ・サーキットと言われているアンナプルナ山群を一周する大回遊コースを選んだ。そのために、日程も 1 ケ月間となり、ポーターも BC までは 14 名という大所帯（ガイド 3 名、コック、キッチンボーイを合わせると我々 4 人を含めて合計 25 人）の大キャラバンとなった。

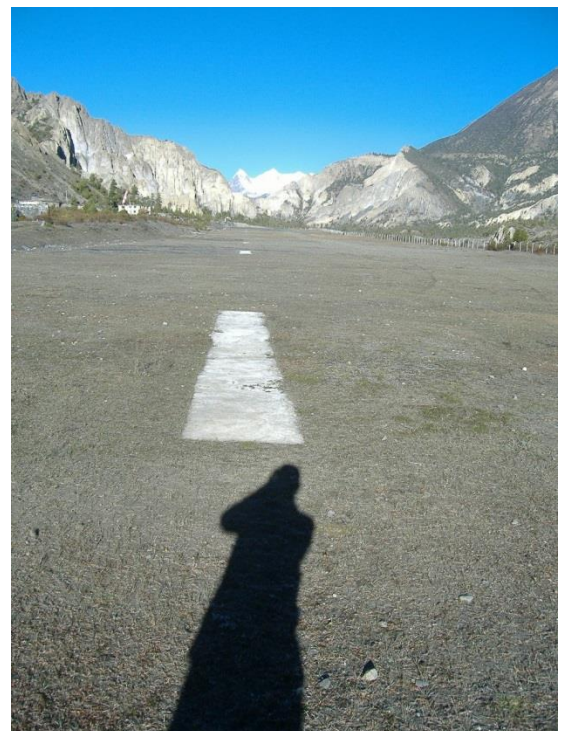


(交通・通商の要衝 キャラバン開始の町ベシ・サハール)





以下は余談であるが、キャラバンの途中でフムデの町にも1泊した。空港がある町とは言え、戸数わずか20軒ばかりの山中の小さい集落であったが、マルシャンディー街道唯一の空港がある町であった。朝、散歩がてらに歩いていると、牛が何匹か滑走路を歩いていたので、牛が入れるのなら人間が入ってもいいだろうとノコノコと滑走路まで行ってみた。



(フムデ空港。寂しい空港ターミナル。右が非舗装の滑走路。
石ころだらけの野原にセンターラインを引いただけのシロモノ)

ポットを抱えたおニいさんがどこからか現われて、「俺ハココノ管制官デアル、今カラかとまんず空港ト交信スルカラ管制塔ヲ見学サセテヤル。ツイテ来イ」とノタマった。これは滅多に無い絶好の機会だ。3階の管制室に上がってみると、管制塔とは名ばかりのシロモノで通信は無線電話だけ、レーダーやパソコンの類は全く無く、壁には幼稚園生でも分かるようなチャチな航空路図が張ってあるだけだった。「私は航空管制システムには大変な知識と興味を持っている。貴殿は優秀な航空管制官とお見受けした。ネパールの管制システムは如何に運営されているのかご教示願いたい」と言ってやったら、相好を崩して「オ〜、左様カ。本官ハ鄙ニハ稀ナル有能ナ管制官デアル。昨年ハ運輸局長表彰モ受ケタノダ。ねぱーるノ管制しすてむニツイテハ後デユックリ講釈シテヤルガ、取リアエズ今朝ノ交信ハオ前ニ任セタ」と言って、チラッと風速風向計と温度・気圧計のデータを眺めて、数字を走り書きした紙を寄越した。マア、どうせ飛行機が来ない日には気象データの報告もいい加減なものであろうし、フムデ上空には他の航空路も無いからイイコロ加減でも全く問題が無いのであろう。おニいさんは交信マイクを私の方に放り投げて、自分はソファーにひっくり返った。



(管制卓。カトマンズ航空管制と交信する小生)

“Good morning, Kathmandu Air Control. This is Humude Tower. Weather Report.

Fair. Cloud zero. Wind two-one-zero, three. Atmospheric pressure seven-one-one.

Temperature fifty. Visibility twenty. Any other else? OK, roger. good day.”

(お早う、カトマンズ管制へ。こちらフムデ・タワー。気象通報。快晴、雲量ゼロ、風向 210 度、風速 3メートル、気圧 711ヘクトパスカル、気温華氏 50 度、視界 20km。他に御用は？ OK。さようなら) カトマンズの管制官はいつもと違う声に驚いたかも知れないが、どうせ飛行機が飛ばない日には使うことも無いデータであるから、適当に聞き流していたのであろう。

話を本題に戻そう。前回イムジャ・ツェで一緒した S 氏は、今回はご母堂の容態の都合で参加できなくなり、新たに藤ノ小路孝麻呂殿下の登場となって、赤鬼、パンチョ共々シリウス大蛇連の 4 人道中となった。人品骨柄生まれつき粗野な小生を除き、何れもやんごとなき貴公子であるが、皆さん大変な酒豪でもある。道中の宴会が楽しみだ。

キャラバンを開始したベシ・サハールは標高 800m に満たない亜熱帯である。町を出ると直ぐに田園地帯となった。此处と比べて標高が 3000 m に近いエベレスト街道の始点ルクラ近辺の畑は高地性のムギ畑であるが、ここでは延々と続く稲田の畦道がキャラバン・ルートである。何か日本の田舎の里山でも散歩しているような気分で、これから 6600m の雪のヒマラヤに登るのだという気が全くしない。



(黄金の稲穂が揺れる棚田)

折から田んぼには稲が黄金色に輝いていて収穫も間近であった。高い雪山も全く見えない

(エベレスト街道では初日のルクラから雪の高山が望めるが、ここではキャラバン 5 日目にしてやっと

マナスルやアンナプルナの端っこ（アンナプルナⅡ）が見え始めるという体たらく。道中の長さが全然違うのである。従って道中泊ったロッジも、山小屋というよりも田んぼの中の出作り小屋といった雰囲気であった。

標高が低いので日中は灼熱地獄。道端の石垣に置いた温度計は50度を指した。道端には南洋の花ブーゲンビリア、真紅のチリ・フラワー（赤唐辛子の格好をした花）や名前は知らないが黄色や濃紺の花が咲き乱れ、パパイアやマンゴーもたわわに実っていて、熱帯と見間違ふばかりである。ネパールといえば、ヒマラヤ高山の寒冷なイメージが強いが、実はネパールの国土は標高ゼロメートルの地帯から8900mのエベレストまでが混在しているのである。元々はインド亜大陸（島）がアジア大陸に押し寄せて繋がり、その勢いで褶曲されて押し上げられた場所がヒマラヤであるが、部分的には押し上げられずに海拔ゼロメートルのまま残った場所も存在しているという訳であろう。海拔ゼロメートルの地帯はインドとの国境に近いタライ平原であり、ここから北方に徐々に標高を増してヒマラヤに至っている。

昼はフライパンの底で炒られているような猛暑であるが、しかし朝夕は寒冷で、空気が乾燥しているので日中でも樹木の下など日陰に入るとヒンヤリと涼しい。ネパールでは道端に菩提樹の巨木が枝を張っていて、根元には仏様や神様の像が祀ってあったり、チョルテン（お経を印刷した旗）が掛かっている場所が多い。神聖な場所である。根元が石垣で囲ってあったりもする。

この辺りの住民は、喰物はその辺にイッパイ生えているし、暑い気候なので衣服も必要無く、雨露を凌ぐアバラ屋さえあれば生活には困らないから、取り立てて仕事をする必要も無い（マア、働こうにも働くべき職も無いのではあるが・・・）。従って、日がな一日この菩提樹の下に屯して無駄話に熱中したり、瞑想に耽ったりしている。悠久な時間を過ごしているようで、考え方によっては実に典雅な生活とも言えよう。このような風土であるから、仏陀が誕生したのではあるまいか。そういえば釈迦の生誕地はインドではなくネパール南部のルンビニであったナ。

余談はさておき、マルシャンディー街道に沿って北上し、5日間くらい歩くと徐々に標高が増えてきて谷筋も陰しくなり、稲に代わって粟やソバ畑の棚畑に変わっていった。平地が少ないネパールの耕地は、山麓から山の頂上までびっしりと小さな棚田が張り付いていて、まさに「耕して天に至る」という表現がぴったり。国内線のプロペラ機から見ると実に壮観な眺めである。この頃からやっと雪の山々が見え始めた。狭い谷筋から見上げると、頭だけではあるが西にラムジュン・



（農村風景。耕して天に至る）

ヒマール（6983m）、アンナプルナ東部の山嶺（アンナプルナⅡ、7937m）、北側にはマナスル（8163m）などのジャイアンツ。アンナプルナ山群はこの奥、西方30Kmにわたって屹立する大山群であり、最高峰のアンナプルナⅠ（8091m）は更に1週間ほど歩いた先のチュルー・ベースキャンプ付近に至って初めて姿を現すのである。マナスルは50年程前に日本隊によって初登頂されたジャイアントである。マナスルとは「精霊の山」という意味であり、優美な貴婦人の如きヒマラヤ襷を纏った顕著なツイン・ピークの山容で有名である。なるほど山頂から精霊が降りて来ても不思議ではないと思わせる雰囲気を持っている。しかし、こちらからの眺めは見上げる角度が異なっているためか、その姿はあまりパツとせず隣に聳えているピーク29（7871m）の方が立派に見えた。（左：マナスル、右：ピーク29⇒）



キャラバンを開始したベシ・サハールの町からマルシャンディー街道を5日間ほど歩くと途中の要衝の町チャーメに至る。この辺りからがマルシャンディー溪谷の核心部となり、溪を隔てた南側の対岸に秀麗なヒマラヤ襞を纏ったアンナプルナ山群やガンガプルナが見えてくる。そのアンナプルナ山群で最初に目にするのがアンナプルナ山群東端のラムジュン・ヒマール6983mとそのすぐ西側に屹立しているアンナプルナⅡ峰7937mで、標高はいずれもヒマラヤジャイアンツとしての8000mには少し満たない山であるが、折からの青天に神々しい姿で屹立していた。



(チャーメへの入り口)



(ラムジュン・ヒマール)



(前衛峰〔左〕が美しいアンナプルナⅡ峰〔右端〕)

このマルシャンディー街道筋(マルシャンディー川筋)はエベレスト街道筋(ドゥードゥーコシ川筋)と違って水に恵まれていて、集落では至る所に水詮が設けられ、飲み水に苦労することは無かった。途中、真っ裸になって行水や洗濯もできた。大抵は付近の女達が洗濯したり髪を洗ったりしているので、イチモツ丸出しでは格好が悪かったが・・・。

余談になるが、若い娘ならともかく、しわくちやの婆さんに至るまで原色のブラジャーやビキニパンティーなどを洗濯していた。この種の下着は道端に山と積んで売ってもしいるから、女心はどこの世界でも同じらしい。きっとトリンプとかいう下着メーカーのパンティー大王がこんな山中までせっせと売り込んでいるに違いない。

話が横道に逸れた。名峰見物ハイクや風俗研究が主たる目的ではないので、本来の登山に戻ろう。ベシ・サハールからキャラバンを開始して11日目にやっとレダーという小さな集落に到着してそのロッジに1泊。翌日目指すチュルー・セントラルのBCに入った。高度計は4,825mを指していた。人気が高いエベレスト街道筋のBCと異なり、他のパーティーの天幕は全く無かった。幕場は他のヒマラヤのBCと同様、広い河原に大岩が転がっている荒涼とした場所ではあつたが、ここからは秀麗なアンナプルナI峰や氷の屏風を連ねた壮大なティリチョ・ピーク(7134m)が



(レダーで泊まったロッジ。人物はコックのリンジ)

間近に眺められ、すぐ目の上にはチュルー・ウェストの氷の西壁がテラテラと輝いていた。昨年のイムジャ・ツェBCは業者テントや登山者のテントで犇き合っていたが、氷河のモレーン横の寒々しい場所で眺望も何も無い鍋の底だったのに比べると、こちらは広々として心が拓がる場所だった。



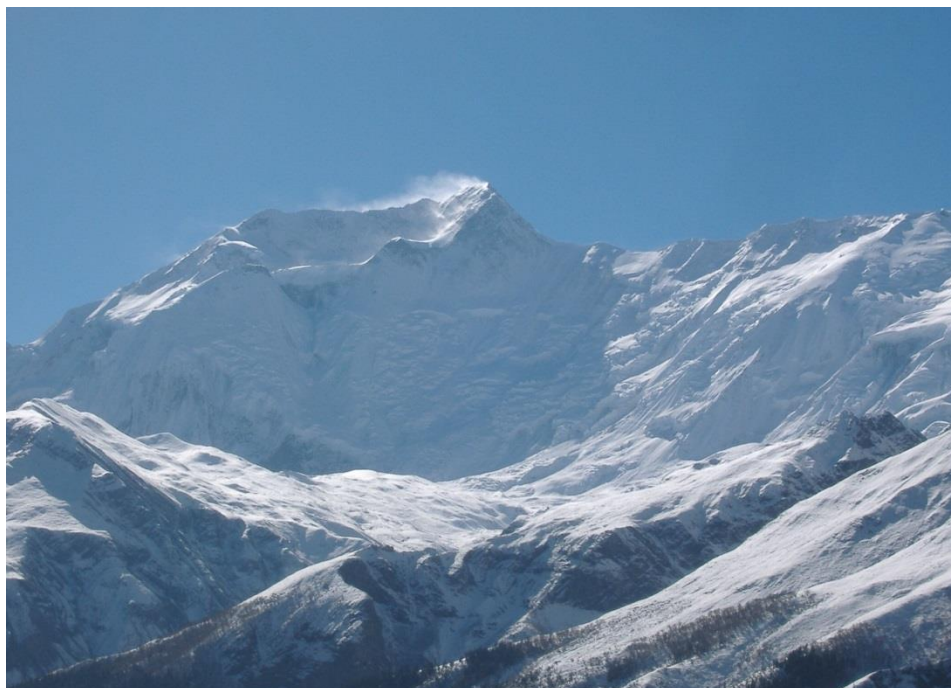
(BCの様子。左端のコルの奥がABC(アドバンスト・ベースキャンプ)



(BCで寛ぐガイドやコック)



(BCから見たアンナプルナ I 峰 8091m (中央)。手前の稜線はティリチョ・ブルク東南端)



(同じく BC からガンガプルナ 7454m)

高度順応のために1日間BCに沈殿して次のステップであるABC(アドバンスト・ベースキャンプ)キャンプに歩を進めた。BCからすぐ上の砂滑りのようなカナレータを3時間も登れば着く距離なのだが、斜面が急で標高も5000mに上がってきているので、息が切れる。

ポーターも半数以上は既に下山させているので、BCから上はハイ・ポータだけになっていて、ガイド3人とコックやキッチンボーイも相当な荷物だ。アシスタント・ガイドのティリ・ヌル・シュルパに至ってはザイルなどでズッシリと重いザックを担ぎ、更にクライアントのザックを手にとって登って来た。少年の頃からポーターで鍛え上げた屈強な彼も、さすがにヒーヒー、ハアハアと大息をしている始末。



(大荷物のティリ・ヌル)

ABC5100m は高い屏風岩の中段の猫の額にへばりついた岩棚（狭いバンド）に設営した。クライアント用テント2張と炊事テント1張を張ればもう場所が無い。天幕の入り口は断崖絶壁からはみ出しているの
で、夜間の小用で墜落しないように天幕の前にロープを張った。ポーターやキッチンボーイは寝る場所
が無いので、用事が済んだら下に降りて寝て、翌朝また登って来た。まさにこれは「通勤」である。ガ
イドやコックは露天のシュラフにくるまって寝ていた。

上述したように、此処まで上って来ても未だお目当てのピーク、セントラル峰は姿を現さなかった。
「前衛」のウェスト峰が雪に輝いているだけである。時間があったから、藤ノ小路孝麻呂殿下は独りで
更に上方のC 1 方面に偵察兼高度順応に出かけた。前日ガイドがセットしたロックバンド下のフィッ
クス・ロープの下端まで登ったようだ。彼は今回の最若手（と言っても還暦は越えているが）だから元
気モリモリだ。現地食も残さず大量に喰う。小生は今回は高度馴化満点ということにして、屏風岩の裏
手を散策してみた。下山後越えるトロン・パスやその両隣に聳えているトロン・ピーク（6209m）、ヤ
クワカン（6482m）が暮れなずむ薄墨の中に黒々と浮かんでいた。



（断崖絶壁に設営された ABC）



（ABC 設営の様子）

ABC からは小用は天幕の中で尿瓶を使った。ダイアモックス（高山病予防薬）を飲んだ身体は一晚に3回くらい要求する。道中で求めた尿瓶は1リットル用であったから、2回目で尿瓶が溢れてしまった。今回の尿瓶は広口壺であるから、小生の大きなモノでもスッポリと入ってしまう。小生のイチモツは未だソノ方面ではポテンシャルが高いと自認しているスグレモノではあるが、生理的機能という面ではそろそろ衰えてきだしたのか、自分自身の液体に浸かっても反応が鈍かった。従って尿瓶が溢れていることに気づかずシュラフを濡らしてしまった。帰国後メーカーに大枚を払ってクリーニングに出す羽目に陥った次第である。アア、情けなヤ。

ABC から先がチュルー登頂の核心部である。ウェスト峰・北西稜を乗っ越して ABC と反対側のウェスト峰の東斜面にあるチュルー氷河に廻り込み、そこからチュルー氷河をチュルー・セントラル峰に向けて直登するのである。この北西稜を乗っ越すためにはその支稜を登らなければならないのであるが、ここにはロックバンドと称されている3段のミックス帯の岩壁があって、ここからはガイドがセットしたフィックス・ロープをユマーリング※で登ることになる。

※ユマーリング＝フィックス・ロープに取り付けた登高器（ユマール）を頼りに登ったり、万が一滑落した場合でも

フィックス・ロープにロックが掛かって墜落を停止できるような仕掛けの登り方。

また、これ以降の雪の斜面では雪崩の危険もあるし、氷河ではヒドゥン・クレバスに墜落したりセラックの崩壊で圧死する危険も無しとしない。また、登頂当日は18時間くらいのアルバイトをしなければならず、6000メートルを越えた標高でのこの労働は相当にキツイと予想される。ひょっとすると、近年話題になっている高山での突然死（心臓・血管系の急性疾患）になる可能性も否定できない。まあ、そのような具合で、セントラル峰はかなり登攀の難易度が高い部類に入っている。

翌日は高度順応のためにC1（標高5800m付近？）まで往復する予定であった。早朝に強風が吹いて、5時頃の出発が9時ごろとなった。ABCを出発してすぐにロックバンドとなった。我々はガイドがセットしたフィックス・ロープのお陰で難なく登れたが、1990年にウェストに登るために此处を通過した立教大学隊はかなり苦労したと、その遠征報告書に書かれている。まあ、難なくと言っても、それは登攀技術面でのことで、息が苦しくて1歩ごとに立ち止まって休む体たらく。上を見上げると赤鬼氏も相当へたばっている様子。人の不幸を見て喜ぶ訳ではないが、内心ホッと一安心したのは、小生も未だ人間ができていない左証。



（ABC から C1 に向かってイザ出発）



（ロックバンドの手前でアンザイレして登る）



(ロックバンドをユマーリングで乗っ越す)



(ロックバンドの上の雪壁をユマーリングで乗越す)

ハアハアと肩で息をしながら3段のロックバンドを乗っ越し、やっとその上の雪の斜面に辿り着いた。此処から上には未だフィックス・ロープが張られていないので、我々は休憩に入り、チーフガイドのパサンとアシスタントガイドのティリ・ヌルがフィックスを張るためにアンザイレンして登って行った。もう一人のアシスタントガイド、ニーマ・シェルパは紅茶のサービスだ。

しかしながら、上に登って行ったガイドの動きを下から見ていると、どうも歩みが遅い。??。やがて彼等2人が降りてきた。「駄目だ。雪が深くてどうにもならない。胸まで潜る。去年のこの時期はバッチ・グーだったのに、昨夜降った新雪に加えて今年は異状に雪が深い。雪崩る確率も高い。氷河の

ヒドゥン・クレバスの状態も不安材料だ。誠に残念ではあるが、旦那の安全を確保するために、ここで登高は中止し下山する。」と宣告した。高度計を見ると 5,600m を指していた。山頂まで未だ 1,000m 近くを残して撤退とは誠に情けない。金のことは言いたくないが、1ヶ月間の日程と 5千ドル近くの大枚を叩いて来たのに、これでは普通のトレッキングと何ら変わらないではないか。帰国してからオカアチャンや岳友に顔向けもできないナ。「1ヶ月も家を空けて遊んで来たのに、またまた登れなかったノ？ 5回も行ったのに、1回も頂上を踏んだためしが無いじゃないのヨ。マ、これも神様の思し召しだよ。これが潮時ネ。たいが〜いにしなサ〜イ。」と、わが意を得たりと釘をお刺しにかかる我が山の神の顔が見えるようだ。ムッ、ムッ。

おまけに目標のセントラル様のご尊顔も未だ拝していないではないか。せめてC 1まで登ればチョロッとでも拝めるかもしれないのに、などと恨めしくなる。

しかし、仮にガイドが我々の足元を見て、些か早目に安全サイド（撤退サイド）を選択したとしても、我々にはガイドの決定を覆すほどの材料が無い。

もう歩く気力も全く失せてきたが、再びフィックス・ロープにユマールをセットして懸垂下降を開始した。



（ウーム残念！撤退の途中で。後方は、これから越えて行く世界最大の峠トロン・パス。左はトロン・ピーク、右はヤクワカン峰）



（懸垂下降でロックバンドを下る）



（本日は右下に豆粒のように見える ABC まで撤退）

ひょっとしたら日本人初登かという淡い期待もどこかに失せ飛んで、涙がチョチョ切れてきた。しかし、よくよく考えて見れば、地球上のどんな辺境にも日本人が滞在し、その足跡を残している現今、初登などということは未踏峰以外にはあり得ないナ。その晩は ABC まで戻って意気の上がない夜を過ごし、翌朝 4 日前に出発した山麓の小集落レダーへ戻って、気分は湿っぽいけれどビールで反省会をしたのであった。



(レダーにて意気の上がない記念撮影)

(ABC からレダーに向けてトボトボと下る。奥の雪山の間の鞍部がこれから越えるトロン・パス。レダーから更に標高差 1200m を登り返さねばならない。撤退で心身ともに立ち上がる元気もなくなったが・・・)

翌朝、ここからカトマンズに帰るチーフガイドのパサン、アシスタントのニーマと別れ、以降はティリ・ヌルをチーフガイドとして残りのアンナプルナ・サーキット一周を完成させるべくトロン・パス越えに出発した。途中の Thorong Phedy という中腹の集落で昼飯になったが、このすぐ上の BC はロッジが沢山建ち並んでいる一大観光地？で、ヨーロッパのトレkkerが多数立ち寄っていた。インターネットトカフェも何軒かあった。ここはアンナプルナ山群の北側から流れ出すマルシャンディー川の最源流部で両岸が切れ立った狭い谷底である。右の写真の両側の岩の間には、写真では殆ど見えないが、タルチョ（経文の旗）が張り渡してあった。一体どのようにして張り渡したのであろうか。毎年 1 回新しいものに取り替えるそうだから、相当な作業であろうが、この辺りの住民は神仏に帰依する情が深いから、喜んで汗を流すのであろう。



(Thorong BC のロッジ群。ヨーロッパのトレkkerで賑わっていた)

その晩は、ここからトロン・パス近くのトロン・ハイキャンプまで登って泊った。ロッジが 2 軒しかない荒涼たる所で、我々の寝床は今は廃屋となっているような崩れかけたロッジであった。標高が高いので (4900m)、ビールも売っていなかった。この高度では欧米人は高山病を恐れてアルコールを飲まないのであるが、我々オロチ連には物足りない一夜となった。

翌日の行程は、いよいよ世界最大の峠、トロン・パス 5416m を越えてトロン分水嶺の反対側の山麓まで下る長丁場であるから、早朝午前 3 時に凍結した雪を踏んで出発した。トロン・パスまでの登りは実にキツかった。1 歩毎に立ち止まってハアハア言う始末。距離僅か 3 km、標高差たった 500m を登るの

に4時間も掛かった。高度順応は既にチュルーでバッチリと出来上がっていたが、かれこれ3週間近くも歩き続けているので、体力と気力が限界に近づいてきたのかも知れない。

ハアハアと大息をしながら、ふと後方を見ると、あった！なんとチュルー・ウェストの稜線の奥にセントラルの頭が覗いているではないか！稜線の向こうに丁度太陽が顔を出したそのすぐ真下に、逆光の黒いシルエットとなって浮かんでいるではないか。大きさは豆粒くらいにしか見えなかったが、暫くは呆然と眺めていた。冒頭に載せた写真がこれである。

トロン・パスは、高度で言えばエベレスト界限の峠に若干負けるが、大きさでは世界最大の峠と言われている。アンナプルナ山群の絶好の展望台として欧米人の人気が高い。日本人には殆ど遇わなかった。もともとアンナプルナ・サーキット自体、回遊に時間がかかるので、休暇が長らく取れない日本人には不向きなのであろう（逆にエベレスト街道周辺のトレッカーは日本人が多い）。



（トロン・パス）

トロン・パスの天辺から、これから下る西方の景色を眺めて見た。今までの景色と何かが変わっているようだ。ゴツゴツした岩山や茶褐色の大地は相変わらずそうであるが、今までの景色が荒涼たる不毛の地一辺倒であったのに比べて、何か心が和らぐような気がした。狭い井戸の底のような所ばかり何日間も歩いて来たので、眼下に広がった平野（？）の佇まいや、同じ茶褐色の泥山でも短い草本が生えていて、これが薄緑色を醸し出しているせいかも知れない。また、ここから先の領域はかつては別の独立王国として他国人には門戸を開放していなかった秘境（ムスタンやドルボ）

への道であるからかも知れない。途中で名峰ダウラギリ（8167m）の姿も見えた。

トロン・パスからの下り道は、単調でしかもダラダラと長くて往生した。眼下に今晚泊る村が見えているのだが、それが全然近づいてくれない。足が棒になってきた頃、やっと辿り着いた村はムクティナートという聖地であった。ここにはヒンドゥーの大寺院とチベット仏教の寺院が同居していた。此処は門前町の佇まいで、泊ったホテルもチベット寺院のすぐ前であった。シャワーもあり、またベッドには蒲団もあってなかなか泊り心地の良い宿であった。皆さん、久しぶりにシャワーを浴びて満足気な様子。早速、今まで控えていたビールに飛びついた。夜も2階のレストランに上がって遅くまで飲んだ。辛くて口の中が火の海になるチキン・チリー（鶏肉を最辛の青唐辛子〔チリー〕で炒めたもの）がビールによく合った。



（トロン・パスをムクティナートに向けて下る）



(トロン・パスからムクティナートに下る道。左端がムクティナートの集落。その右向うはジャルコット集落。
連嶺の向こうがムスタンとドルポ)



(ムクティナートの集落。仏教とヒンドゥー教が同居している聖地)



(ダウラギリ・ヒマールの盟主ダウラギリ 8176m(左))

翌日、この辺りの拠点となっているジョムソンという町まで下った。此処は飛行場や学校や銀行もあり、また軍の山岳兵養成所などもある大きな集落であった。町の目抜き通りにはホテルや商店が所狭しと並んでいた。目の前にはニルギリ峰（7601m）が白く輝いていた。

当初の計画では、ここから飛行機でポカラ経由カトマンズに帰る予定であったが、チュルーの撤退で4日間ほどの暇ができた。それではということでガイドと相談して、カリガンダキ川沿いの道を露天風呂のあるタトパニに至り、そこから再び山中に入って、ゴレパニ、ビレタニを経由して、今まで北側から見てきたアンナプルナ山群などを今度は南側から眺めながら、ポカラの街まで歩こうということになった。

小生は残念ながら、4日程前から痛み出していた歯に、いよいよ激痛が走りだして、全く食事が摂れなくなってきたので、ジョムソン空港から一人で一足お先にポカラに飛んでここで歯の治療を受けながら3人を待つということにして皆と別れた。ジョムソンからポカラまでは、たった20分の飛行であったが、目の下に広がる景色は素晴らしかった。溪谷沿いを舐めるように飛行するので、高い山々は見えなかったが、機上から見えた「耕して天に至る」棚田やポカラのヘワ湖は見事であった。

ポカラの街で歯医者者を二、三見つけたが、どれも治療を頼む気がしないくらい汚かった。玄関には野犬が寝そべり、窓では汚れたニワトリがエサを漁っていた。

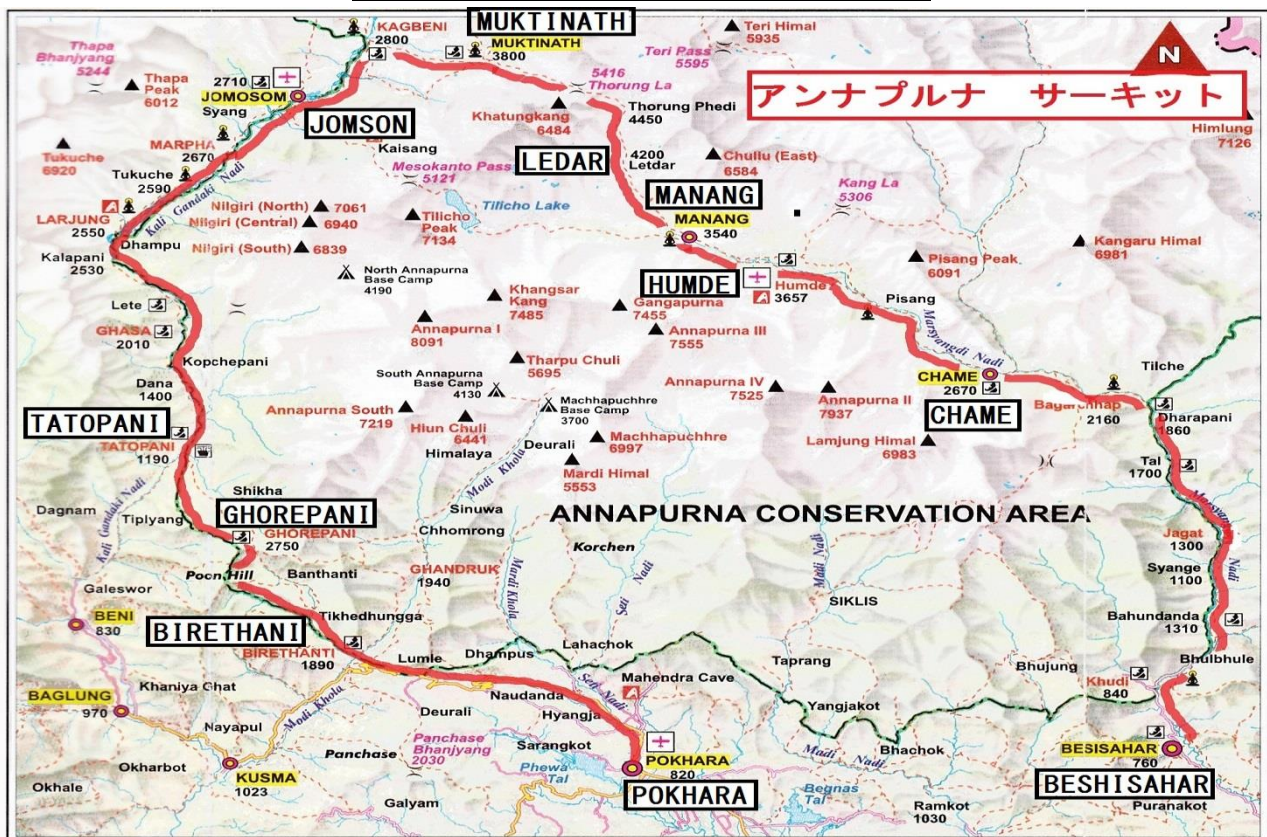
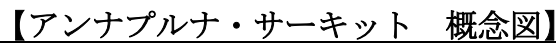
これではかえってネパール特産のバイキンが入って大事になると、今度は病院に行ってみた。「歯科は本日臨時休診」の札が出ていた。翌日も同様だった。かれこれする内に気圧が上がってきた関係か、歯痛も峠を越したようなので、皆さんから掻き集めた歯痛止め・化膿防止薬・腫れ止め薬を大量に服用して何とか日本までもたすことにして、独りのポカラ滞在を観光に没頭することにした。ポカラは昨年訪れていたから大体の様子は分かっていたので、地元観光局で貰った地図を頼りに地図に載っている名所旧跡を残らず訪ね歩いた。レンタサイクルも借りてみた。1日100ルピーだから、タクシー料金に比べて雲泥の差であった。しかし、ネパールの自転車は重い上にサドルが硬いときているから、尻の皮がむげたり、ふくらはぎがパンパンになったり、前後左右を車やオートバイや三輪車や牛に挟まれて身動きがとれなかったりで散々だった。レンタサイクルは半日で止めにして、後は専ら二本足で稼いだ。

ポカラでは、ポカラ博物館、アンナプルナ地域博物館、ヒンディーの匂いがプンプンしている下町オールド・バザール、チベットの難民キャンプ、ヘワ湖に浮かぶヒンディーの寺・Barahi Temple、ヘワ湖の湖尻から落ちる巨大な滝がそのまま洞窟に吸い込まれて消えてしまう奇景 **Devi's Fall**、世界平和仏舎利塔などを歩き回った。世界平和仏舎利塔は日本のナントカいう宗派の本山が建てた寺院で、ヘワ湖の対岸の丘の山頂にあり、ポカラ市街やヘワ湖が眼下に一望できる絶好のビューポイントであった。トレッキング組が到着するまでの4日間、歩いては飲み休んでは飲みしていたので、ビール代とチキン・チリー代がかなりな額になった。観光客用レストランなどには入らず、地元民ご用達の汚い一杯飯屋ばかりだったから、ツマミのチキン・チリーは安いものだったが、ビールは日本の安赤提灯くらいの値段であった。マ、歯痛のために液体で栄養分を補給したと思いたい。

ポカラ観光のことはまたの機会に書くとして、最後に、チュルー・セントラル登山の概念図、アンナプルナ・サーキットの概念図、及び今回の日程を次頁以降に付記して本稿を終わりたい。

最後に、ガイド（チュルー登攀時はサブガイド）を務めてくれて、またツアー万端を切り盛りしてくれたティリ・ヌル・シェルパのご苦勞を多としたい。

Based on the *Survey of India*, personal observation,
and expedition reports from Cleare, Noble, Schietle
and O'Connell.



【日程表】

itinerary	date	weather	origin	destination	accommodation
DAY— 1	10/11	fair	Narita	Bangkok	Bangkok airport
DAY— 2	10/12	fair	Bangkok	Kathmandu	The Everest Hotel
DAY— 3	10/13	fair	Kathmand(7 hrs by bus)	Beshi Sahar	Tibetan Hotel
DAY— 4	10/14	fair	Beshi Sahar	Ngadi	Hiker's Lodge
DAY— 5	10/15	fair	Ngadi	Syange	あばら家
DAY— 6	10/16	rain	Syange	Tal	Tilicho Hotel
DAY— 7	10/17	fair	Tal	Timang	Hotel Royal Garden
DAY— 8	10/18	fair	Timang	Bhratang	Raju Hotel
DAY— 9	10/19	fair	Bhratang	Humde	Snow Land Gest House
DAY—10	10/20	fair	Humde	Tangki,Manang	Tangki Lodge
DAY—11	10/21	fair	stay at Tangki,Manang for acclimatization	Tangki,Manang	Tangki Lodge
DAY—12	10/22	fair	Tangki,Manang	Ledar	Chulu West Hotel
DAY—13	10/23	fair	Ledar	BC	Tent at BC
DAY—14	10/24	fair	stay at BC for acclimatization)	BC	Tent at BC
DAY—15	10/25	fair	BC	ABC	Tent at ABC
DAY—16	10/26	fair	ABC (climbing to 5600m & retire there	ABC	Tent at ABC
DAY—17	10/27	fair	ABC	Ledar	Tent at Ledar
DAY—18	10/28	fair	Ledar	Thron Hi-Camp	Lodge
DAY—19	10/29	fair	Thron Hi-Camp	Muktinath	The Royal Mustang
DAY—20	10/30	fair	Muktinath	Jomson	The Moonlight Hotel
DAY—21	10/31	fair	Jomson	Pokhara	Hotel Lake Palace
DAY—22	11/ 1	fair	stay at Pokhara	Region Museum	Hotel Lake Palace
DAY—32	11/ 2	fair	stay at Pokhara	Barahi Temple, Old Bazar	Hotel Lake Palace
DAY—24	11/ 3	fair	stay at Pokhara	Peace Stupa, Devi's all,G.Cave	Hotel Lake Palace
DAY—25	11/04	fair	stay at Pokhara	MountainMuseum	Hotel Lake Palace
DAY—26	11/05	fair	Pokhara	Kathmandu	The Everest Hotel
DAY—27	11/06	fair	stay at Kathmandu	Patan,Boudhanath	The Everest Hotel
DAY—28	11/07	fair	stay at Kathmandu	Swyanbhunath	The Everest Hotel
DAY—29	11/08	fair	Kathmandu	Bangkok	
DAY—30	11/09	fair	Bangkok	Narita	

(本稿 完)

⇒ [「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)